

第2章

表現活動を媒介とする子どものワークショップ 研究の検討

そこでまず、遡って検索可能な過去の約30年間の子どもに関するワークショップの論文数の推移やその領域、さらに本研究が対象とする表現活動を媒介とする子どものワークショップに関連が深い、美術・造形活動分野のワークショップ研究の目的や研究方法を検討する。

なお、本研究が対象とする表現活動を媒介とする子どもとのワークショップ実践は、専門的な美術のアート系ワークショップや教育・学習系ワークショップとは少し異なる位置づけにあるが、現段階では直接に比較検討する先行研究や理論的枠組みが少ないため、さしあたっては近接領域であるアート系及び教育・学習系のワークショップ研究にまたがる美術教育に関するワークショップ研究を中心に考察を進めていく。

1. 研究論文の推移

図2-1は過去約30年間の子どもに関するワークショップの論文数の推移である。検索可能なワークショップに関する論文は1983年以降、現在までで365件である(2015年1月26日現在)¹⁾。

1990年代まではほぼ年間10件以下の登録数である。この時期は障害者福祉、心理療法、演劇、美術とまちづくりなどでの研究が行なわれている。この時期の美術・造形表現に関するワークショップは美術館教育が牽引しており、論文ではないが美術館教育におけるワークショップの調査報告書が宮城県美術館(齋, 1993; 新妻, 1996)と三重県立美術館(森本, 1998)から発行

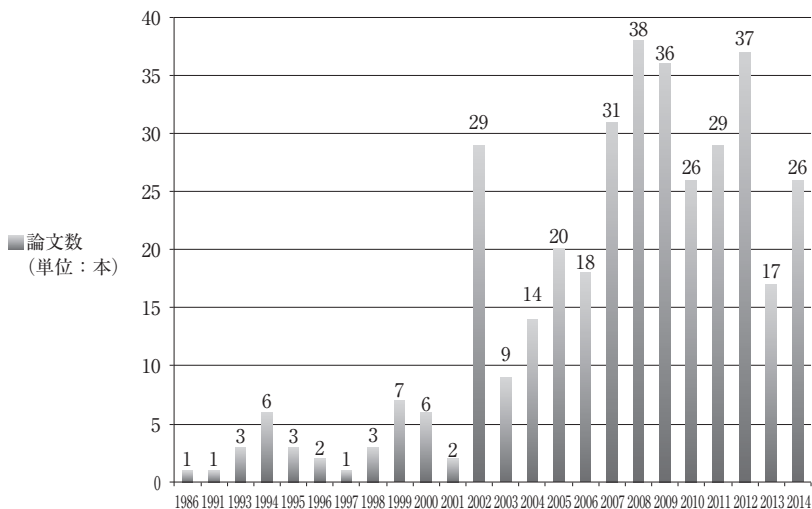


図2-1 子どものワークショップに関する研究論文数の推移（2015年1月26日現在）

されている。全国美術館会議の教育普及に関するワーキング・グループが1993年に発足しており、同会議ワーキング・グループがまとめた『全国美術館会議教育普及ワーキング・グループ活動報告1 美術館の教育普及・実践理念とその現状』（全国美術館会議編，1997）は1990年代の子どもの表現活動とワークショップの重要な現状確認と実践の理論的な検討，課題点の整理を行なっている。その他にもデータベース登録がなされていない当時の大学紀要の論文があると考えますが，全体的にまだそう多くはない時期である。後続のワークショップ研究の基礎とされた高田研の修士論文、「ワークショップの課題と展望—合意形成と身体解放の視点から—」も1996年に執筆されている。この時期の研究は数が少なく，刊行されたものもまだ少ない。

2000年代に入るとワークショップ研究は増え始める。学校教育において2000年に始まった「総合的な学習の時間」は，自分たちで課題を発見し，体験的で協同的な活動を通して課題解決を図る学習活動である。先行して普及していたワークショップと共通点が多く，学校教育関係者にもワーク

ワークショップが注目され始めた。また、2001年には中野によって『ワークショップ 新しい学びと創造の場』が刊行され、「参加体験型のグループ学習」(p. 132)といった学習活動としての定義が明確になされたことにより、参加体験型の協同的な学習としてのワークショップの認知と普及が加速する足場づくりが進んだと考える。アート系ワークショップに関する著書でも高橋・杉山(2002)による『ワークショップ実践研究』が刊行されている。教育学系からは佐藤・今井他(2003)による『子どもたちの想像力を育む—アート教育の思想と実践』が刊行され、従来の学校での美術や音楽といった教科教育とは異なる原理からのアートの教育実践の可能性が提起され、その理論的な論考に加え、現代美術の美術館(和多利, 2003)やアーティストによる学校でのワークショップ(堤, 2003)等の事例が紹介されている。2002年は心理援助に関する登録論文が多いため急激な増加となっているが、それらを除いても1990年代の年間10本以内の状況から著しく増え始めていることが分かる。

2005年以降になると年間20本から40本弱の数で推移し、1990年代に比べて年間約7倍から10倍程度に増えている。この頃からワークショップの方法論や実践理論の研究も取り組まれ始める。広石(2006)の「ワークショップの学び論—社会構成主義からみた参加型学習の持つ意義—」では、社会構成主義の知識観に基づいたワークショップ理論や、田尻(2005)、荻宿・佐伯・高木(2012a, b, c)によるレイヴ&ウエンガー(Lave, J. & Wenger, E., 1991)の「正統的周辺参加論」に基づく学び論や、教育工学分野での学習環境デザインやワークショップ実践者の熟達化の研究(高尾・荻宿, 2008; 森, 2008, 2009; 安斎・森・山内, 2011; 菊池・荻宿・脇本・小林, 2012; 植村・荻宿, 2012)、心理学に基づくワークショップの評価(谷井・無藤・大谷・杉森, 2007)や教育的効果の検討(縣・岡田, 2009)も行なわれている。美術教育では多くの実践研究や実践から理論を生成する研究が多数生み出された(上浦, 2005, 2006; 片岡, 2006; 畑中, 2006; 山田, 2007; 渡辺, 2008, 2010; 茂木他, 2009; 手塚・茂木他, 2009, 2012, 2013; 初田・吉田, 2012; 茂木・亀井, 2012; 杉本・岡田, 2013; 茂木・郡司, 2013; 茂木・藤原, 2014; 茂木他, 2014; 笠原, 2014; 笠原・春野, 2015a, b; 笠原, 2015)。